

Glocal Tenri



10

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.12 No.10 October 2011

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
人間の“たね”はどじょう
／深谷忠一 1
- ・ 天理教教理史断章 (70)
その他の文書⑬
／安井幹夫 2
- ・ 天理異文化伝道の諸相 (最終回)
コンゴ伝道に見る異文化接触 (49)
／森 洋明 4
- ・ 天理教海外伝道の資料 (20)
満州伝道関連史料④
／深川治道 6
- ・ 今日の時代における宗教批判の克服学 (34)
いま内村鑑三を読む意義は何か
／金子 昭 7
- ・ ハワイ人とキリスト教：文化と信仰の
民族誌学 (31)
シンクレティズム再考
／井上昭洋 8
- ・ 世界平和のための宗教対話 (28)
カソリックの「世界青年の日」
／山口英雄 9
- ・ 天理スポーツ (17)
天理スポーツ シンポジウム⑦
／難波真理 10
- ・ アメリカ通信 (7)
バークレー留学体験記：Islam の授業風景
／深谷耕治 11
- ・ 平成 23 年度公開教学講座
「現代社会と天理教」(2)
第 5 講：“無縁社会”への処方箋
／金子 昭 12
- ・ English Summary 13
- ・ おやさと研究所ニュース 14
出張報告：日本福祉のまちづくり学会・第 14 回
全国大会に参加して／特別講座「東日本震災に
おける天理教の救援」の報告／日本宗教学会第
70 回学術大会に出席／日本印度学仏教学会第 62
回学術大会に出席

巻頭言

人間の“たね”はどじょう

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

『天理教教典』第三章「元の理」の中に、「親神は、どろ海中のどじょうを皆食べて、その心根を味い、これを人間のたねとされた。」とあります。親神が人間を創造される時に、その“たね”に使われたのは、どじょうだといわれるのです。

そこで、何故人間の“たね”はどじょうなのか？そのワケを種々考えてみますと、先ず、どじょうは、漢字で“泥鰌”と書くように泥の中に棲んでいます。その泥の中でうごめく姿からは、土中からいのちが湧いてくるかのような印象を与えます。つまり、人間はあの世・彼岸で生まれたのではなく、この宇宙・星の子供として生まれ出されたのだと、泥の中のどじょうの姿が教えているように感ぜられるのです。

他方、どじょうは、泥水の中で棲みながらも、ヌルヌルの肌ゆえに、自分自身は泥まみれにはなりません。むしろ、どじょうは、泥水の有機物を濾し取って栄養を摂ることにより、泥水を浄化しています。自らの環境から糧を得ながら、その環境を改善してもいるのです。そのことから、人間の“たね”には、自然環境の中で生存しつつ、それを超えた人間圏を構成する能力が付与されていると悟れるのです。

また、どじょうには、腸呼吸をするという特性があります。通常はエラと皮膚で呼吸をするのですが、水の温度が上がって気圧が低くなると、水中の酸素が欠乏するために、水面に出ての腸呼吸で酸素の補給をします。それで英語では、どじょうのことを、weather fish (天気予報をする魚) といって、未来を感知する能力があるとされます。また、水面に出て腸呼吸をするのは、どじょうが現状(普通の呼吸)だけで満足せず、新しい環境でのいのちの展開を模索する姿だともみなせます。つまり、人間の“たね”には、未来を予知する能力があり、また、新たなフロンティアを求めて進む指向性が備わっている。それで、人類は水中から陸上に上がり、世界の隅々まで広がっていき、さらには大空をも目指す存在になったと思えるのです。

さらには、また、どじょうには、群生を好み、複数で狭い空間に肩を寄せ合って生きるとい

う習性があります。親神は、その群れなすどじょうを皆一度に食して、人間の“たね”とされた。つまり、人間の“たね”は、個別に創られたのではなく、最初から一群のものとして創られたのです。したがって、人間の“たね”には序列はなく、ある特定の個人、また、人種や民族が他より優れているということはない。人間は本源的には皆平等だといえるのです。

さらに申せば、どじょうは、安来節の“どじょうすくい”でお馴染みのように、ザルをつかって群れごとと掬い取りますが、そのザルの中のどじょうは、重なり合い絡み合って動きまわります。その姿から、お互いにクネクネと交わりあって生きるのが人間の本性である。つまり、無縁社会で個別・孤独に生きるのとは人間本来の姿でなく、お互いに身を寄せ合い支え合って生きるのが、人のあるべき姿だと悟れるのです。

また、どじょうを食するという点から考えますと、たとえば、どじょうには魚類中最大のカルシウムが含まれていて、食べると、イライラを鎮めて神経を安定させるし、骨粗鬆症を予防するのにも役立つといわれます。さらには、どじょうには、ビタミンDが豊富で、カルシウムやリンの腸内吸収を促進するともいわれ、また、皮膚の表面のヌメリには、コンドロイチンやコラーゲンが含まれ、細胞の働きを活発にして炎症やガンの増殖を抑えたり、皮膚のシワやシミを防ぐのにも有効だといわれます。

この栄養豊富などじょうが人間の“たね”に使われたのは、人間の身体の潜在能力の高さを示すとともに、人間誰しもが、他の栄養になれる一人のために役に立てる能力を持っていることを、示唆されていると思うのです。

さて、この度、新しく日本のリーダーになられたどじょう宰相。彼がこの魚についてどれだけ詳しいのかは不明ですが、本教の信仰に多大な影響を受けた実業家が創設された政経塾の第一期生でもある彼が、願わくば、親神がどじょうを人間の“たね”に選ばれた所以をもよく学んで、本物のどじょう宰相になって活躍されることを、密かに期待している次第です。